

寄贈図書リスト

新天文学：楢岡軌道の発見，ヨハネス・ケプラー著，岸本良彦訳，A5判，688頁，10,000円＋税，工作舎

宇宙の始まりはどこまで見えたか？，平林 久，四六判，186頁，1,800円＋税，角川学芸出版
地球接近天体，ドナルド・ヨーマンズ著，山田陽志郎訳，A5判，184頁，2,600円＋税，地人書館

月報だより

月報だよりの原稿は毎月20日締切，翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。校正をお願いしておりますので，締切日よりなるべく早めにお申込みください。

e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp 宛。

なお，原稿も必ずFaxで0422-31-5487までお送りください。

人事公募結果

1. 掲載号
2. 結果（前所属）
3. 着任時期

平成26年度国立天文台プロジェクト研究員 （年俸制特任研究員）

○野辺山宇宙電波観測所

1. 2013年11月（第106巻第11号）以下全て共通
2. 西村 淳
3. 2014年4月

○ハワイ観測所

2. Thayne CURRIE
3. 2014年9月

○チリ観測所

2. Patricio SANHUEZA
3. 2014年7月

○天文データセンター

2. 樋口祐一
3. 2014年4月

2. Christopher ZAPART
3. 2014年4月

○TMT推進室

2. 原川紘季
3. 2014年4月

募集をして結果の掲載をしていないプロジェクトは，採用を行っていません。

賞の推薦

公益財団法人 井上科学振興財団 2014年度井上學術賞受賞候補者募集

第31回井上學術賞推薦要項

1. 概要：自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を上げた50歳未満の研究者に対し，學術賞（賞状および金メダル，副賞200万円）を贈呈します。
2. 募集方法：指定の関係34学会，および財団の役員・評議員等からの推薦。
3. 天文学会からの推薦件数：2件
4. 推薦締切日：2014年8月15日（金）日本天文学会事務所必着。
5. 「2014年度推薦書．xls」に必要事項を記入の上，メールの添付ファイルとして，jimu@asj.or.jp 宛てお送りください。
日本天文学会への推薦に必要な申込用紙は下記財団のホームページにあります。
<http://www.inoue-zaidan.or.jp/f-01.html>

研究助成

公益財団法人住友財団 2014年度2件の研究助成

基礎科学研究助成

助成の趣旨：科学の進歩は社会の発展に大きな貢献を果たしてきました。科学は人類社会の未来を拓くことにつながるものです。この助成は，重要でありながら研究資金が不十分とされている基礎科学研究，とりわけ新しい発想が期待される若手研究者による

萌芽的な研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：理学（数学，物理学，化学，生物学）の各分野およびこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの（それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む。）

応募資格：「若手研究者」

募集期間：2014年4月15日（火）～6月30日（月）

詳細は，下記URLを参照してください。

<http://www.sumitomo.or.jp/>

環境研究助成

助成の趣旨：現在，人類が直面している大きな問題の一つに環境問題があります。地球温暖化，オゾン層破壊，酸性雨，生物種の減少，食料と人口，砂漠化，公害等さまざまな問題があり，その原因の探究と解決策の模索が続けられています。この助成は，環境問題の解決のためには，多面的アプローチによる分析と様々な対応策の構築が必要と考え，そのためのいろいろな観点（人文科学・社会科学・自然科学）からの研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：

- ・一般研究 環境に関する研究（分野は問いません。）
- ・課題研究 2014年度募集課題「持続可能な社会への着実な転換を可能にする方策に関する研究」

応募資格：研究者の所属が営利企業（兼務を含む）の場合には応募不可ですが，ほかには特に制約はしていません。

助成金：総額1億1,000万円

一般研究9,000万円 1件当たり最大 500万円

課題研究2,000万円 1件当たり最大1,000万円

助成件数：一般研究 50件程度

課題研究 2件を予定

募集期間：2014年4月15日（火）～6月30日（月）

※e-mailの締切は6月23日（月）となっております。ご注意ください。

応募方法：財団ホームページ（本ページ最下部URL）から申請書をダウンロードし必要事項を記入の上，e-mailと郵送の両方でお送りください。

連絡先：〒105-0012 東京都港区芝大門1-12-16

住友芝大門ビル2号館

公益財団法人 住友財団

Tel: 03-5473-0161 Fax: 03-5473-8471

e-mail: sumitomo-found@msj.biglobe.ne.jp

URL: <http://www.sumitomo.or.jp/>

公益財団法人井上科学振興財団顕彰・研究助成

2014年度井上研究奨励賞

井上研究奨励賞（Inoue Research Award for Young Scientists）の贈呈

理学，医学，薬学，工学，農学等の分野で過去3年の間に博士の学位を取得した37歳未満の研究者で，優れた博士論文を提出した若手研究者に対し井上研究奨励賞（賞状・メダルおよび副賞50万円）を贈呈します。

2015年度井上リサーチアワード

井上リサーチアワード（Inoue Science Research Award）の贈呈

自然科学の基礎的研究で優れた業績を上げ，さらに開拓的發展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援することを目的とします。

自然科学の基礎的研究で博士の学位取得後9年未満のわが国の国公私立大学および大学共同利用機関に所属（予定を含む）する研究者で，これまでの成果を踏まえ，単独または共同研究者の協力を得て行う将来性豊かな研究者に対し井上リサーチアワード（賞状および研究助成金一人当たり500万円）を贈呈します。

○詳細は下記URLを参照してください。

<http://www.inoue-zaidan.or.jp/>

研究会・集案案内

第10回最新の天文学の普及をめざすワークショップ

—@ ALMA, チリ—

〈参加者募集〉

国立天文台天文情報センターは，現在行われている天文学研究最前線の様子を広く社会に伝えるため天文学普及のためのワークショップを開催いたします。

日時：2014年9月22日（月）午前集合～26日（金）19時解散

（チリ共和国サンティアゴ市集合/解散）

場所：国立天文台チリ観測所およびアルマ望遠鏡山麓施設・山頂施設

対象：プラネタリウム・公開天文台・科学館職員・学校等の職員で天文学の普及に関わっている方および科学コミュニケーターや科学教育普及に興味をもつ学生。今回は標高5,000mの観測所を訪問しますので，体力

的に可能な方が対象です。
(日本国内で健康診断を受診していただく
場合があります)

募集予定定員: 約14名

費用: 実費負担

航空運賃約25万(国際航空券20万, 国内
航空券5万), 宿泊費6万(15,000円/泊
×4泊)ほかに陸路交通費, 食費, 懇親会
費等の実費を納めていただきます。

宿泊: サンティアゴのホテル(22日1泊), サン
ペドロ・デ・アタカマのホテル(23日~
26日3泊)

応募方法: 希望者は氏名, 連絡先, e-mailアドレス,
所属を明記して, レポート「チリ, ALMA
観測所でのWSへの期待」(A4, 1ページ程
度)を添付して6月20日までに下記宛先
へお送りください。参加者選考結果は7月
7日までに本人あて通知します。

応募締切: 2014年6月20日(金)

応募先: 郵送またはメール

〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1
国立天文台天文情報センター
「最新の天文学の普及をめざすワーク
ショップ」係

e-mail: shoichi.itoh@nao.ac.jp

主催: 自然科学研究機構 国立天文台

共催: (予定) 日本プラネタリウム協議会, 日本
公開天文台協会, 天文教育普及研究会

後援: (予定) 日本天文学会

ワークショップの目標

- (1) ALMAの成果をプラネタリウム, 公開天文
台, 科学館あるいは学校などの教育現場で活
用してもらうため
- (2) ALMAを理解するためのフレームワーク作り
のため
- (3) 研究者ならびに関係者とのコラボレーション
のため

主な内容(予定)

* 講義: アルマ望遠鏡プロジェクトの歴史と概要
アルマ望遠鏡の観測装置
アルマ望遠鏡の最新科学成果

* 見学: アルマ望遠鏡山麓施設(標高2,900 m)
アルマ望遠鏡山頂施設(標高5,000 m)

問合せ先: 〒181-8588 三鷹市大沢2-21-1

自然科学研究機構国立天文台
天文情報センター 伊東昌市
Tel: 0422-34-3900(内線3395)

Fax: 0422-34-3810

e-mail: shoichi.itoh@nao.ac.jp

京都大学 飛騨天文台一般公開のお知らせ

京都大学飛騨天文台では, 来たる7月26日(土)に
一般公開を行います。施設の公開と天体観望会を行
い, 京大天文台で現在行われている最先端の天文学研
究をわかりやすく説明します。

事前申込が必要で。定員100名(抽選)。

〈一般公開〉

日時: 2014年7月26日(土) 13:00~20:30

場所: 岐阜県高山市上宝町蔵柱

京都大学大学院理学研究科附属飛騨天文台
公開施設: ドームレス太陽望遠鏡(DST), 太陽磁場
活動望遠鏡(SMART) 65 cm屈折望遠鏡,
60 cm反射望遠鏡

内容: DSTによる太陽像と分光スペクトル観望
(昼)

SMARTによる太陽像の観察(昼)と解説
65 cm屈折望遠鏡および小型望遠鏡による
夜間天体観望(土星など)

最先端の天文学研究解説(講演)など

〈交通機関〉 公共交通機関がありませんので, JR高
山駅または上宝支所(高山市上宝町本郷)までお
越してください。JR高山駅と上宝支所からシャトル
バス(有料)を運行します。詳細は, 附属天文台の
ホームページをご覧ください。

〈申込方法〉 ホームページからお申込みください。

受付期間: 6月24日(火)から6月30日(月)

定員: 100名(申込多数の場合は抽選)

抽選結果は, 7月上旬にお知らせします。

〈問合せ先〉

〒506-1314 岐阜県高山市上宝町蔵柱

京都大学飛騨天文台

Tel: 0578-86-2311 Fax: 0578-86-2118

e-mail: hida2014@kwasan.kyoto-u.ac.jp

e-mailでのお問い合わせの場合は,

件名を「7/26飛騨一般公開」としてください。

〈附属天文台ホームページ〉

<http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/>

〈主催〉 京都大学大学院理学研究科附属天文台, NPO
法人花山星空ネットワーク

〈後援〉 岐阜県高山市

〈協力〉 高山観光バス

会務案内

日本天文学会 2014年春季年会報告

2014年春季年会は、3月19日(水)から22日(土)の4日間、国際基督教大学(東京都三鷹市)にて口頭講演会場10、ポスター会場10を使って開催された。講演件数は口頭講演が481件、ポスター講演が240件

で、合計721件の講演があった。年会参加者は1073名であった。これに加えジュニアセッションの参加者が529名あった。また、以下に報告するように、通常セッションに加え特別セッション2件、企画セッション3件も開催された。開催地理事の石丸有里氏や学生の皆さんのご尽力により、順調に進行した。

座長は次の58名の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し、感謝の意を表する(敬称略)

	3月19日(水)	3月20日(木)		3月21日(金)		3月22日(土)	
	13:00-15:00	09:30-11:30	13:30-15:30	09:30-11:30	13:30-15:30	09:30-11:30	13:30-15:30
A会場	r & GW 田中雅臣 (国立天文台)	r & GW 和南城伸也 (国立天文台)	r & GW 関口雄一郎 (京都大学)	ALMA Toshikazu Onishi	ALMA Ken Tatematsu	ALMA Kentarō Motohara	
B会場	天文学史 縣秀彦 (国立天文台)	天文学史 白田-佐藤功美子 (国立天文台)	恒星 田中培生 (東京大学)	恒星 前田啓一 (京都大学)	銀河形成 嶋作一大 (東京大学)	銀河形成 松田有一 (国立天文台)	銀河形成 小野宜昭 (東京大学)
C会場	宇宙論 高橋龍一 (弘前大学)	宇宙論 大橋隆哉 (首都大学東京)	星間現象 水野範和 (国立天文台)	星間現象 渡邊祥正 (東京大学)	星間現象 土井靖生 (東京大学)	星間現象 内山秀樹 (静岡大学)	
D会場	高密度星 大野雅功 (広島大学)	高密度星 寺田幸功 (埼玉大学)	高密度星 山田真也 (理研/首都大学)	高密度星 海老沢研 (ISAS/JAXA)	高密度星 米徳大輔 (金沢大学)	高密度星 根來均 (日本大学)	
E会場	地上観 米倉覚則 (茨城大学)	地上観 小嶋崇文 (国立天文台)	地上観 新沼浩太郎 (山口大学)	地上観 諸隈智貴 (東京大学)	地上観 秋山正幸 (東北大学)	地上観 安東正樹 (東京大学)	
F会場	銀河団 星野晶夫 (立教大学)	星・惑星 花輪知幸 (千葉大学)	星・惑星 小林浩 (名古屋大学)	星・惑星 竹内拓 (東京工業大学)	星・惑星 坂井南美 (東京大学)	星・惑星 平松正顕 (国立天文台)	
G会場	教育・他 橋本修 (ぐんま天文台)	教育・他/銀河 嶺重慎 (京都大学)	銀河 藤井通子 (国立天文台)	銀河 松永典之 (東京大学)	活動銀河核 大藪進喜 (名古屋大学)	活動銀河核 田中康之 (広島大学)	活動銀河核 松元亮治 (千葉大学)
H会場	太陽系 奥住聡 (東京工業大学)	超新星爆発 富永望 (甲南大学)	太陽 石川遼子 (国立天文台)	太陽 草野完也 (名古屋大学)	太陽 増田智 (名古屋大学)	太陽 久保勇樹 (NICT)	太陽 原弘久 (国立天文台)
I会場	飛翔観 山下卓也 (国立天文台)	飛翔観 鹿野良平 (国立天文台)	飛翔観 和田武彦 (ISAS/JAXA)	飛翔観 谷津陽一 (東京工業大学)	飛翔観 竹井洋 (ISAS/JAXA)	飛翔観 坂本貴紀 (青山学院大学)	飛翔観 林田清 (大阪大学)

〈記者会見〉

春季年会の前日、3月18日(火)13:00から国際基督教大学にて行われた。桜井隆会長からの挨拶と日本天文学会春季年会の簡単な紹介の後、各講演者から以下のトピックスについて解説が行われた。公開講演会、ジュニアセッションについても紹介を行った。報道機関7社の出席があった。

●研究発表

- (1) 「銀河団における巨大なエネルギーの流れを発見～銀河たちも、低きに流れていた～」
記者会見出席者：牧島一夫(東京大学・大学院理学系研究科・教授)ほか
関連する講演番号：T04a
- (2) 「すばる望遠鏡での観測により、太陽とそっくりな星でスーパーフレアを起きることを発見！」
記者会見出席者：野上大作(京都大学・大学

院理学研究科・助教)ほか

関連する講演番号: M35a, M36a, N17a

〈特別セッション〉

【ALMA特別セッション: ALMAアーカイブデータが切り拓く天文学】

ALMA特別セッションは、年会一日目の3月19日17:00から約1時間半、A会場で開催され、約200名の参加者があった。最初に、林正彦氏(国立天文台長)からイントロダクションとして、もしこれまでにALMAのプロポーザルが通っていても、ALMAアーカイブというデータの宝の山を使って面白い研究ができることが、これまでに出版されたアーカイブ論文を例にして紹介された。次に長尾透氏(愛媛大学教授)により、銀河形成分野での三つのALMAアーカイブの活用法(たくさんのプロジェクトのデータを集めた統計的な研究、新たな観点や手法による解析、自前の別のデータとの組み合わせ)が、アーカイブデータから観測プロポーザルにつなげる実例とともに紹介された。その後、廣田朋也氏(国立天文台助教)により、星形成分野でのALMAデータには無数の輝線が受かる例が紹介され、新たな観点による解析の大切さが強調された。最後にErik Muller氏(国立天文台特任助教)から、ALMAアーカイブの使い方として、アーカイブの構成、データの構造、データ検索とダウンロードの仕方についての説明があった。今回の特別セッションを通じて、研究者が独自の視点をもつことで面白い研究を展開できる可能性を秘めたALMAアーカイブという認識を参加者と共有できたと考えている。また、参加者からはレビューアとしての経験から今後のプロポーザルの書き方に関するコメントも飛び出すなど、アーカイブデータを超えてALMA全体へ期待も強く感じられた。(松田有一)

【TMT特別セッション】

国立天文台が国際協力で進めているTMT計画は、本格建設開始に向けて大きく動いている。その進捗と今後の見通しを報告し、議論いただくために、年会初日の3月19日に、TMT特別セッションを開催した。セッションはA会場で1時間半にわたって開かれ、200人ほどの参加者で立ち見ができるほどの盛況であった。

今回は現状を多くの会員に知っていただくことを目的として、国立天文台TMT推進室から3人が報告を行った。家正則室長からは、国際協議の状況と合意書締結・TMT国際天文台設立に向けた準備の進捗、本格建設開始と今後のスケジュール等が報告された。白田知史教授からは、日本の分担である望遠鏡構造と

主鏡の製作について、その内容と開発・製造の進捗が報告された。柏川伸成准教授からは、TMTの観測装置と運用方針、日本での観測装置開発の予定などが報告された。

講演後の議論では、とくにTMTが国際協力で建設され、インターフェイスが複雑であることについて、それにどう対応するのか、といった点で質問やコメントが多く出された。(青木和光)

〈企画セッション〉

【rプロセスと重力波天文学】

本企画セッション「rプロセスと重力波天文学」は、KAGRA等の次世代重力波検出装置の本格的な運用が数年後に迫った今、重力波源の電磁波対応天体特定の切り札と考えられているrプロセス新星やそれに関連する研究成果の発表および意見交換の場とすることを目的として企画された。依頼した6件の基調講演に加え、tennet等で募ったところ、17件の講演の申込みがあった。セッションは年会初日の午後から2日目の午後にかけてA会場で開催され、常に100名(最大で推定180名程度)を超える参加者により、活発な議論が交わされた。講演は、重力波源の最有力候補である連星中性子星合体の数値流体シミュレーションやrプロセス元素合成、rプロセス新星などの電磁波対応天体、銀河化学進化などの理論研究に加え、重力波観測、ガンマ線観測、金属欠乏星観測等、多岐にわたるものだった。それにもかかわらず、すべての講演がrプロセスや重力波をキーワードとする極めてレベルの高いものであり、内容の多彩さからは想像できないほど一貫性のあるセッションとなった。本セッションを通じて、rプロセス元素(金やウランなど鉄より重い元素)の起源の解明には、さまざまな波長にわたる観測、とりわけ重力波観測およびその電磁波対応天体であるrプロセス新星の光赤外観測が重要であることが確認された。以上より、本企画セッションは、このテーマに沿った今後の共同研究や研究会などの活動に向けたスタートラインとして十分な役割を果たしたと考えている。

(和南城伸也)

【First Results from ALMA】

ALMAの初期科学運用(Cycle 0, Cycle 1)や科学評価観測(Science Verification)では、すでに他のミリ波・サブミリ波望遠鏡をはるかにしのぐ性能が実証されており、銀河系内の星形成領域、近傍銀河、さらには遠方銀河の輝線観測の成果が続々と発表されている。今回の国際企画セッションは、ALMAを使った最新の科学成果を東アジア地域の研究者に紹介してもら

い、今後の研究の議論を深めることを目的として企画された。tennetなどにサーキュラーを配信した結果、5件の基調講演に加え、16件の口頭講演の申込みがあった。セッションは、年会3日目の午前から4日目の午前にかけてA会場にて行われ、各セッションに約60名の研究者の参加があった。また、日本だけでなく台湾（4名）や韓国（1名）、イギリス（1名）の研究者も参加し、ALMAの成果が紹介され、今後展開されるサイエンスについての活発な議論が行われた。

基調講演では、Sheng-Yuan Liu氏（ASIAA Associate Research Fellow: 星形成分野）、山本智氏（東京大学教授: 星間化学分野）、百瀬宗武氏（茨城大学教授: 惑星系形成分野）、大内正己氏（東京大学准教授: High-z分野）、河野孝太郎氏（東京大学教授: 近傍銀河分野）によりALMAの最新科学成果のレビューが行われた。いずれも既存の電波望遠鏡では得ることのできない高品質なデータをもとにした研究成果である。また、Jongsoo Kim氏（KASI）からは、韓国におけるALMAの活動についての紹介があった。ALMAでは、まもなく3回目の科学運用（Cycle 2）が始まる。Cycle 2では、日本が開発を担当したBand 4（150 GHz帯）とBand 8（400 GHz帯）の受信機が公開され、重水素化合物（Band 4）や炭素原子（Band 8）が観測できるようになる。東アジア地域発の科学的ブレイクスルーに期待したい。（伊王野大介）

【天文学史とその資料収集・調査・研究】

日本天文学会年会には、以前は「天文学史」を発表するセッションがあったが、最近「Y. 天文教育・その他」のセッションでの発表となっていた。「その他」となっているのと「天文学史」となっているのでは意識は異なる。天文学は、人類の歴史の中で最も古い科学ともいえ、人間の生活とともに発達してきており、その研究、調査、資料収集を行っている研究者は多く、関連研究者が一堂に会して意見交換を行い、関連する資料保存に対する重要性を再認識していただくことを目的として企画された。講演は、一般講演を多くできればと基調講演を1件とし、tennetなどにサーキュラーを配信して講演を募ったところ、24件の申込みがあった。セッションは、年會初日の午後から2日目の午前にかけてB会場にて行われ、両日六十数名の多くの方々に参加するという盛況なものとなった。実は、世話人としてこの企画セッションを申込み際に、天文教育と重ならないように要望したのであるが、同時開催となってしまった。心配したように両セッション行ったり来たりの方もいたと聞いたが、多くの方に興味をもっていただけたのかなど思っている。基調講演では、

「天文学の歴史に関心・意義を感じるか否かは、その国民・民族の科学文化の成熟度を示す一つの指標である」との話があり、同時に天文学者の認識の熟成度の指標になるとの考えが示され、日本の科学（天文学）の研究者は、科学史に対する意識は低い、との話があった。つづく講演では、多岐にわたる報告があった。民衆の生活の中にある星に関する伝承、宇宙にまつわる神話伝説、天文学と航海術との関連がある古地球儀の公開、などの資料の収集、公開から長年にわたる貴重書の展示公開、望遠鏡、プラネタリウムの保存、歴史の中での指摘、記事の紹介から、新しい技術を使用している古い施設公開、展示室、天文ミュージアム構想の紹介と、時系列に見てもこれだけでも歴史がわかる。また、われわれも避けて通れない、公文書の管理についても指摘があった。最後に、総合討論の時間を設け、活発な議論が行われた。特に、今後このセッションを天文学会での独立したセッションとして継続するのは難しいので、「天文教育・普及・天文学史」などと改名できないかとの意見もでた。また、この分野についての課題として、データベース化の遅れと、情報伝達と普及の大切さが挙げられた。収集物の活用、特に教育への活用とどのように将来へつなげるかも大切である。この分野に関心のある天文分野の人々の認識を高め、ネットワークを構築する必要があるろう、との提案もあった。これらを踏まえ、この企画セッションが当該分野の研究者、関係者の認識を高めるうえでのきっかけとしての役割を果たせたか考える。（大島紀夫）

〈研究奨励賞・林忠四郎賞受賞記念講演〉

年会2日目16:30から1時間30分間、2013年度研究奨励賞・林忠四郎賞受賞記念講演が行われた。講演者およびタイトルは以下のとおりである。

研究奨励賞受賞記念講演

小嶋崇文氏（国立天文台）「ALMA Band 10広帯域低雑音SISミキサの研究開発」

當真賢二氏（東北大学）「高エネルギー天文学の魅力とその広がり」

成田憲保氏（国立天文台）「トランジット惑星系の観測による太陽系外惑星の研究」

林忠四郎賞受賞者講演

山本智氏（東京大学）「Why Chemistry? Why not Chemistry?」

〈天文教育フォーラム〉

天文教育普及研究会との共催、日本学術会議物理学委員会IAU分科会の後援で、2014年3月21日（金）15:30より17:00までA会場にて「社会は天文学に

なにを期待しているのか？」をテーマに行われた。参加者数は150名であった。2013年春季年会における天文教育フォーラム「天文学は社会をリードできるか？」で議論された内容を踏まえ、今回は天文コミュニティ外から3名の登壇者を迎えての話題提供と議論を行った。

まず文部科学省の齊藤卓也さんから、国家財政と科学技術振興費についての状況、他の分野と比較しての個人的見解を紹介いただいた。広報面では天文分野は健闘しているが、プロジェクトの大型化・極限的な競争に伴い、より多方面からのアプローチが必要になっていると指摘された。最近の動きについても一般にあまり知られておらず、政策的にも転換期にあるダイナミックな分野であるという認識があまりされていないのではないかと指摘があった。他分野への広報ノウハウの伝達についても期待が述べられた。株式会社リクルートジョブズの仲川薫さんは、ビジネスに携わる人の観点から、天文が人々の生活にもたらす変化について指摘された。宇宙を考えるきっかけとなる出会いをどう作り出すか、そのうえで天文がもたらすことのできる、人間の挑戦に対する感動、俯瞰して物事を捉えることなど既存概念からの変化といったものに意義があるとのことであった。東京大学の横山禎徳さんからは、天文のもつ一般的な観点「ワンダー」「美」「畏怖」が日常からなくなる中で、それを取り戻すことの重要性、人々の宇宙観や人間観を転換を促すアプローチの必要性を指摘された。また、専門家の縦割りではない、細分化されないで議論ができる場所の必要性として「トランス・サイエンス」の観点をもったシステムの確立も考慮すべきと提案があった。

議論も活発に行われ、従来の普及活動ではアプローチしきれていない層に対し、感動だけでなく訴えを持った発信方法、多様な思考パターンに応じたテーマや方法をもつことなど、具体的なアイデアも出された。天文学が社会に対してアプローチし、新たな知見をもたらすことのできる可能性が多くあることが垣間見えた。終了後も登壇者と参加者が個別に長くディスカッションを行い、盛会であった。(安藤享平)

〈懇親会〉

年会3日目にあたる3月21日(金)、この日の夜は懇親会が催された。会場は国際基督教大学(ICU)内の大学食堂。2010年にリニューアルされ、まだ真新しさの残る食堂だ。開宴時間の17:30が近づくと、続々と参加者が会場に集まり、総勢272名(一般175名、学生97名、招待34名)にも達した。事前に申し込んだ参加者は197名(一般144名、学生53名)で

あったが、当日申込みで41名もの参加があったお陰で、学生アルバイトは全員招待だ。ICU大学院理学専攻主任の久保謙哉教授による歓迎の挨拶に続いて、櫻井隆会長の乾杯とともに、いよいよ宴が始まった。懇親会のお目当ては、ICUワインこと“Musashino Cross”。ICU卒業生が南アフリカのワイナリーで生産した極上ワインで、参加者一同その味を堪能した。テーブルの上には、テリーヌ、ローストビーフ、クスクスに点心、深大寺蕎麦といったまさに“International”な料理が次々と運ばれる。ICUの落ち葉を堆肥にして育った地元野菜も彩りを添えた。三鷹市認定のおみやげ〈TAKA-1〉の商品の直売も行われ、手作りどらやきやキウイフィナンシェ、国立天文台とのコラボTシャツなどについつい財布の紐も緩む。宴のたけなわには、開催地世話人より、次回開催地となる山形大学の柴田晋平氏に引き継ぎが行われた。こうして、いついまでも楽しい歓談の時が続いていたが、20時過ぎには後ろ髪を引かれつつも散会となったのである。(石丸友里)

〈保育室〉

保育室を国際基督教大学シーベリー礼拝堂内集会室にて開設した。7家族子供9名の利用があった。準備にあたり国際基督教大学のスタッフの方々にご協力いただいたことを感謝する。(峰崎岳夫、中道晶香)

〈ジュニアセッション〉

第16回ジュニアセッションを、日本天文学会の主催、天文教育普及研究会、高校生天体観測ネットワークの共催、日本学術会議IAU分科会の後援で東京三鷹市・国際基督教大学を会場として行われた。口頭とポスターでの発表58件とポスターのみの発表24件、合計82件の発表があった。この中に、タイから高校生7名による発表(7件)も含まれている。なお、プログラムや各講演の予稿集がジュニアセッションHP(<http://ursa.phys.kyushu-u.ac.jp/jsession/>)より見ることができる。

2000年春に17件の発表から始まったジュニアセッションも、毎年発表件数が増加し、金環日食の起きた昨年度(2013年春、第15回)では、81件の発表があった。昨年、2013年は、「彗星年」であり、今回のジュニアセッションでは、さらに多くの発表申込みが期待された。2014年は、学会期間中の3月21日(金曜日)が祝日であったこともあり、ジュニアセッションにおいて初めての試みとして、口頭セッションを3月21日(金曜日)、22日(土曜日)の2日間にわたり実施した。ジュニアセッションへの参加者は、初日

は、延べ550名、2日間で、延べ1,000名を超えた。

ところで、2013年は、3月のパンスターズ彗星(C/2011 L4)に続き、アイソン彗星(C/2012 S1)、年末のラプジョイ彗星(C/2013 R1)と期待される彗星が次々やってきた。特に、アイソン彗星は、太陽表面近傍を通過するサングレーザー彗星であったため、近日点の通過後は世紀の大彗星になると期待されていた。多くの高校の天文部では、この機会に彗星の観測を準備していたという。しかし、アイソン彗星は、近日点通過時に彗星核が崩壊消滅し、多くの人々が落胆したことは記憶に新しい。今回の発表でも、アイソン彗星について、近日点通過前の光度曲線や近日点通過後の残存核の探査など、彗星関連の発表が7件あった。もし、アイソン彗星が大彗星になっていれば、さらに多くの発表申込みがあったに違いない。

さて、研究発表は、12のセッション(「夜空の明るさ」10件、「太陽」8件、「惑星」5件、「流星・彗星I」5件、「小惑星」5件、「銀河・銀河系」8件、「タイセッション」7件、「宇宙開発」7件、「月・彗星II」9件、「食連星」6件、「恒星・新星」8件、「星雲・星団」4件)で2日間にわたって行われた。口頭発表は、3月21日の午後(150分)と3月22日の午前(120分)・午後(150分)の3回に分けて行われた。発表件数の多さから、口頭発表は各学校やグループで1件のみと変更していただいたにもかかわらず、1件あたりの発表時間は僅か6分(タイセッションは、7件の発表および質疑を含めて40分)と短くせざるをえなかった。一方で、ポスターセッションは、21日の午前中と22日の昼の時間を確保し、生徒同士や研究者と間の議論や交流が進んだ。なお、今回、ポスターのみの発表者に、1分間のショート・プレゼンテーションの時間を作った。

司会は、3月21日の午後は大朝由美子氏(埼玉大学)と松本直紀(慶応義塾高等学校)、3月22日の午前中は道嶋香氏(京都産業大学)と坂江隆志氏(埼玉県立浦和西高等学校)、午後は藤原智子氏(九州大学)と直井雅文氏(埼玉県立浦和高等学校)に務めていただいた。また、マイク係として、埼玉県立蕨高等学校・国立長野高専の生徒の皆さんにお手伝いいただいた。なお3月21日の夕方には、早稲田大学で開催された高校生天体観測ネットワーク全国フォーラムの中でジュニアセッション交流会を催していただいた。

今回のジュニアセッションでの特徴として、小学生の発表が2件、中学生の発表が8件(中高生混合グループ含む)と高校生以下の発表が目立ったことがある。いずれの発表も身近な題材をテーマとし、自分たちの観測データを使って展開する、すばらしい発表であった。また、タイからの発表も7件もあり、国際色

豊かな発表になった。

これらすべての催しに対し、開催地理事の石丸友里氏、および運営に携わった学会関係者、ジュニアセッション世話役の皆さんをはじめ、多くの方々に多大なご協力をいただいたことに、改めて感謝の意を表する(大西浩次)

〈公開講演会〉

3月23日(日)、公開講演会「人は宇宙に何をみってきたのか」が、国際基督教大学ディッフエンドルフ記念館オーデトリウムにて開催された。地球に生を受けた私たち人間は、古より天空を見つめ、豊かな時代も不安な時代も天文学という学問を絶やすことはなかった。一体、人間は宇宙に何を求めてきたのだろう。講演会では、3名の講師によって過去・現在・未来の人々の見つめる先にある宇宙像に迫った。

開場時間の1時間ほど前には、早くも人々が集まり始めた。用意した425枚の整理券は瞬間になくなったが、それでもなお、続々と会場へ向かう人並みは途切れない。会場内は立ち見であふれ、やむなくロビーにも椅子を並べる。こうして、世代を超えて宇宙への憧れを抱いたおよそ550名もの参加者で、会場は開演前から熱気に包まれたのである。

13時。惑星ソラリスのテーマが流れるなか、いよいよ講演会が始まった。司会者の筆者による講演会へのいざないの後、櫻井隆会長の挨拶が述べられ、つづいて国際基督教大学の日比谷潤子学長による歓迎の挨拶がなされた。そして迎えた第一講演—古の人々の眼差し—の講師は、東洋英和女学院大学学長の村上陽一郎先生である。「天文学は『役立つ』学問だった」という題目に見るように、今でこそ天文学は世の実利とは無縁のように思われがちであるが、人類発祥の時代から実は社会になくなくてはならないものであった。そして今も、宇宙を追求せずにはいられないという人たちがいる。そのような人達を守ることこそ、人間の文化を愛することである、というメッセージをいただいた。

つづいて、銀河鉄道の夜のテーマとともに、第二講演—現代の私たちの眼差し—が始まった。講師は東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構の村山斉機構長。「宇宙は何でできているのか」と題し、物質の起源を主軸に、星や銀河の誕生に欠かせなかった暗黒物質・暗黒エネルギーの存在、そして宇宙の誕生へとダイナミックな講演であった。折しも講演の数日前には、インフレーションを裏づける原子重力波の痕跡の発見が、世間を賑わせたばかり。話題はこの最新ニュースにおよび、会場は大いに盛り上がった。

最後に、未知との遭遇のテーマとともに始まったのは、第三講演—未来へ向けた眼差し—である。国立天文台の青木和光先生が、「新たな宇宙像を切り拓く天文観測～超大型望遠鏡TMTの挑戦」と題して、2022年に稼働予定のTMT望遠鏡が目指すサイエンスを紹介された。人類の尽きぬ宇宙への憧れの眼差しの前に、次世代望遠鏡が何をを見せてくれるのか。会場は期待で包まれた。その後、3名の講師の先生方への活発な質疑応答が行われた。参加者からの質問は尽きず、予定終了時刻を大幅に延長することとなったが、これも今回の三つの講演がたいへん魅力的であったためにほかならない。誰もが宇宙に魅せられ、たいへん充実したひと時となった。

なお、この講演会は国際基督教大学と自然科学研究機構国立天文台による共催によって、三鷹市、三鷹市教育委員会、NPO法人三鷹ネットワーク大学推進機構、日本学術会議物理学委員会IAU文化会の後援で開催された。

(石丸友里)

(年会実行委員長：宮田隆志)

「会員名簿」掲載情報受付のお知らせ

今年も隔年で発行している会員名簿の更新時期になりました。今回発行する名簿も前回同様、以下の方針で発行することになりましたので、皆様のご協力をよろしくお願いたします。

●原則全員掲載項目

1. 会員番号・種別（必須）
2. 氏名（必須）
3. 所属（or業種）

4. eメールアドレス
5. 所属先の電話番号
- 希望者のみ掲載項目
6. 自宅住所
7. 自宅電話番号

※次の方のみご連絡ください。

- ・登録情報に変更がある方
- ・原則全員掲載項目の3.を一般的職種名に書き換えた方
- ・原則全員掲載項目の4.5.で非掲載希望項目がある方
- ・希望者のみ掲載項目の6.7.に掲載したい方

《締切：6月30日（必着）》

※2012年の名簿発行の際に掲載項目について連絡されていても、新しい名簿データ作成の前にリセットされますので、上記にあてはまる方は改めてご連絡ください。

※ご連絡いただかない限り、「原則全員掲載項目」（1～5）のみが掲載されます。掲載内容は、会員登録データに登録されているもの（入会届や変更届に記載のもの）になります。

連絡方法

日本天文学会ホームページの「各種手続・書式」にある回答用の「会員名簿用カードテンプレート」（URL: <http://www.asj.or.jp/asj/meibo2014template.html>）を使用し、meibo2014@asj.or.jpまでEメール送信してください。

Eメールがない方のみ、今月号の綴じ込みハガキをご利用ください。

天文月報オンライン/投稿用アップローダーのIDとパスワード

ID: asj 2005

パスワード：雑誌コード（5桁の数字と）vol98（5文字）の計10文字を入力してください。「雑誌コード」とは印刷版の月報の裏表紙の右下に書かれている「雑誌○○○○○—▲」の○○○○○の部分です。○○○○○は各号共通の数字です。

青木和光(編集長), 市来浄與, 大栗真宗, 勝川行雄, 富永 望, 平松正顕, 廣田朋也, 馬場 彩, 前野将太, 町田正博, 吉田二美

平成26年5月20日

発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内

公益社団法人 日本天文学会

印刷発行

印刷所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-8

株式会社 国際文献社

定価720円(本体667円)

発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内

公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359 (事務所) / 0422-31-5488 (月報) Fax: 0422-31-5487 振替口座00160-1-13595

日本天文学会のウェブサイト <http://www.asj.or.jp/> 月報編集e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会2014年（本誌掲載記事は無断転載を禁じます）